

報 告

幼児用対人的自己効力感尺度の開発

園 田 菜 摘

〔論文要旨〕

本研究では、幼児期の対人的な有能さへの自己評価を測定する尺度を開発することを目的とした。児童用の尺度をもとに、絵カードを用いた幼児用対人的自己効力感尺度を作成し、幼稚園年長児70名（男児35名、女児35名）を対象に面接調査を行った。併存的妥当性を検討するために、対人的自己効力感の測定後に、有能感・受容感の測定を行った。また、2か月後に尺度の再検査を実施した。幼児用対人的自己効力感尺度12項目について主成分分析を行った結果、すべての項目が第1主成分にまとまり、内的整合性も認められた。さらに、再検査信頼性、併存的妥当性も確認された。幼児の対人的自己効力感の特徴についても考察を行った。

Key words : 幼児, 対人的自己効力感, 信頼性, 妥当性

I. はじめに

人は自分のさまざまな能力や性格特徴に基づいて、自分自身に関する評価を行っている。自己評価が高いことは、物事に積極的にチャレンジしたり、否定的な出来事が起きてもそれに効果的に対処することを可能にする一方で、自己評価の低さは、鬱、引っ込み思案、孤独感など周りの世界から自らを回避させるような行動につながるものが指摘されている¹⁾。

自己評価の形成は、自己意識が芽生える幼児期からすでに始まっている。幼児期の自己評価の特徴を検討した研究^{2,3)}では、「自分は価値ある存在か」といった自己への全体的評価はまだ難しいが、領域的な評価は可能であること、小学生以降の子どもと比較して、幼児は実際の能力以上に自分を高く評価する傾向があることが明らかにされている。幼児がなぜ高い自己評価をするのかについては、幼児期には学業成績のような客観的に能力を判断する指標が少ないこと³⁾、幼児

が「自分はこうありたい」という願望と実際の自分の能力との区別を明確には行っていないこと²⁾などが理由として挙げられている。一方、高い自己評価を持つことは、まだわからないことや失敗経験が多い幼児にとって、難しい状況にも果敢にチャレンジし、さまざまなスキルを身につけて成長していくうえで重要なエネルギー源となっている^{4,5)}、とも考えられている。実際に、高い自己評価を持つことが“標準”である幼児期には、相対的に自己評価が低いことが孤独感、引っ込み思案といった幼児の内面的な問題と関連し⁶⁾、児童期以降の自己評価、社会性の発達の土台となると考えられている⁷⁾。

幼児の自己評価を測定する尺度はこれまでいくつか開発されているが、Harterら²⁾が開発した有能感・受容感尺度が最も広く使用されている尺度である⁶⁾。有能感とは、“環境と効果的に相互作用する能力”と定義され、幼児においては「速く走れる」などの運動面、「上手に絵が描ける」などの学習面、という領域的な

Development of the Pictorial Scale of Social Self-efficacy for Young Children

Natsumi SONODA

横浜国立大学教育人間科学部（研究職）

別刷請求先：園田菜摘 横浜国立大学教育人間科学部 〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2

Tel/Fax : 045-339-3309

[2662]

受付 14. 8. 18

採用 15. 11. 4

有能さに対する自己評価が測定されている。これまでこの尺度が最も使用されてきた理由として、幼児用の測定尺度として最初に開発されたものであり、その日本語版³⁾も含めて信頼性、妥当性が確認されていること、児童期・青年期の尺度をもとに幼児用が作成されているので、幼児期と児童期以降の自己評価の特徴の違いの比較が可能であることが挙げられるだろう。さらに、有能感・受容感尺度は絵カードを用いて幼児自身に評価を求める測定方法をとっていることから、教師評定により測定する方法⁸⁾よりも、“自己”という幼児の内面的な意識そのものをとらえられることや、絵カードの代わりにパペット（指人形）を用いて幼児自身に評価させる測定方法^{9,10)}のような、パペットを操る調査者の個人的特徴（声色、パペットの動かし方、演技力など）やパペットのキャラクター（カエル、ワニなど）に対する幼児の好み結果に影響を与える可能性を排除できることも、この尺度の利点であると考えられる。

しかし、これまでの幼児の自己評価を測定する尺度では、学習能力、運動能力に関する有能さへの自己評価を測定するのみで、“対人的な領域での有能さ”について幼児が自分自身をどのように評価しているか、という視点が含まれていない問題がある。対人的な領域の自己評価については、これまで「自分は他者から受容されているか」といった“対人関係の良好さ”への評価が受容感として取り上げられてきた。しかし、対人関係の良好さへの評価と、「自分は他者に対して有能にふるまうことができるか」といった対人的な有能さへの評価は異なるものである。児童期の子どもについては、すでに子どもの対人的な有能さの自己評価を測定する必要性が指摘され¹¹⁾、対人的自己効力感と呼ばれる尺度が開発されている^{11,12)}。そもそも自己効力感とは、“特定の課題を効果的に解決できるという自信”と定義され、有能感とほぼ同義ではあるが、課題に対する実際の成功経験によって導かれるという側面をより重視した考え方に基づいたものである。小学4～6年生の子どもを対象にした研究¹²⁾では、子どもの対人的自己効力感の低さは対人不安傾向と関連することが示されており、対人的な有能さに対する自己評価が対人的な問題と密接に結びつく可能性を支持している。一方、幼児期は仲間関係を形成し、仲間とかかわる経験を通して社会的行動の土台を身につけていく重要な時期である。遊びやけんかといった仲間とのさ

まざまなやりとりの成功・失敗経験を通して、対人行動のスキルを徐々に学んでいだけでなく、「自分は仲間の有能にふるまうことができるか」に関する自己評価も幼児期に形成されていくのではないだろうか。幼児期に自分自身の対人行動に自信が持てないことは社会性の発達を含めたさまざまな問題の根幹となる可能性も考えられるため、幼児期の対人的自己効力感を測定する尺度を開発することは急務であると考えられる。

以上のことから、本研究では対人的な有能さに関する幼児自身の自己評価を測定する尺度として幼児用対人的自己効力感尺度を開発し、その信頼性、妥当性を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象

横浜市内の私立幼稚園に在園する年長児、男児35名、女児35名の計70名（平均月齢73.20か月、SD 3.39）を対象とした。

なお本研究の実施にあたり、研究の目的は幼児の対人的な自己評価を測定しその特徴を探るものであること、データは全体として統計的に処理されるため個人のデータが公表されることはないことについて、幼稚園を通じて保護者に伝え、保護者からの了承が得られた子どものみを対象とした。

2. 幼児用対人的自己効力感尺度の測定

(1) 尺度の構成

幼児用対人的自己効力感尺度の項目を作成するにあたり、児童用の尺度¹²⁾を参考に、以下の手順で新たに幼児版を作成した。児童用の尺度¹²⁾は、質問紙法で子どもに16項目を4件法で答えさせるものであるが、幼児用の尺度においては幼児の負担を考慮して項目数を減らすこととした。まず、2つの項目で互いに類似した内容を尋ねているもの（例えば、「友だちのけんかを止める」と「けんかしている友だちを仲直りさせる」）が3組（6項目）あったため、それぞれを1つの項目にまとめた。さらに、幼児期の対人的自己効力感として、“課題を効果的に解決できる自信”を表しているとは判断しづらかった1項目（「友だちにじょうだんを言って笑わせる」）を除き、幼児期にみられやすい対人的課題に関する1項目（「ある子どものパーティーに『お友だちも呼んだら』と言ったら、呼んでもらえる」）を独自に作成して加えた。その結果、幼

児用の尺度の項目は計12項目となった。それぞれの項目は、幼稚園場面に合うように質問内容を変更し（例えば、「体育の授業」を「先生からの指示」に変更する、など）、文言はすべて幼児に理解しやすい形に作り変えた。

(2) 絵カードの作成

幼児用対人的自己効力感尺度では、質問項目を幼児に提示する際に絵カードを用いることとした。有能感・受容感尺度においても絵カードを用いているが、こちらは「上手にできる子」と「できない子」の絵カードのみを左右に置いて幼児に提示するが、自己効力感尺度では「解決しなければならない課題」に対して「効果的にふるまえるか」を尋ねるため、まず対人的にどのような課題が生じているかを幼児に理解させることが重要であると考えた。そこで、「課題の状況を説明するための絵カード」を最初に幼児に提示したうえで、次にその状況で「効果的にふるまえる子」と「ふるまえない子」の絵カードを左右に置く形で提示することとした。そのため、1つの項目につき状況を説明する絵カードと、「効果的にふるまえる子」と「効果的にふるまえない子」の2枚の絵カードの、計3枚の絵カードを作成し、それぞれ男児用・女児用の2種類を用意した。

また、「効果的にふるまえる子」と「ふるまえない子」の絵カードだけでなく、そのふるまいをどれくらいの頻度で行うかを尋ねるために、大小の円が描かれたカードを作成した。

(3) 面接の手続きと評定

面接は2013年10～11月にかけて、自由遊び場面、バスの送迎の待ち時間を利用して幼稚園の1室で行われた。面接では、調査者が子どもに「今日はこれから先生とゲームをしましょう。このゲームは『どっちが○（子どもの名前）くん／ちゃんに似てるかな?』というゲームです。先生がこれから絵の中の男の子／女の子が何をしているかお話ししていきます。よく聞いて下さいね」という教示を与え、調査にとりかかった。調査の具体的な流れとしては、子どもに1枚目の絵カード（例えば①の絵カード）を見せながら、「お友だちがけんかをしています。男の子／女の子が『仲直りしなよ』と言いました」と状況を説明し、次に2枚目の絵カードを見せながら「（子どもから見て左の絵を指差して）こっちの男の子／女の子はお友だちをうまく仲直りさせることができます。（子どもから見

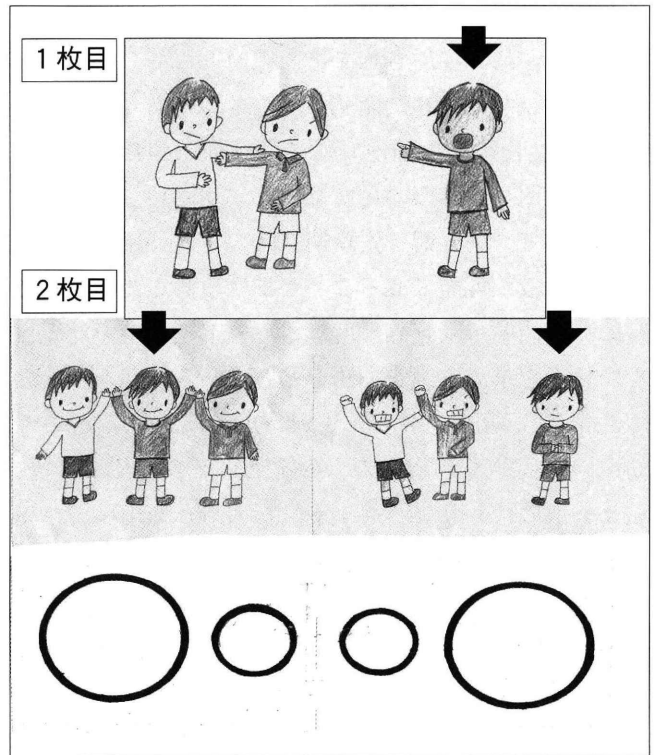


図 対人的自己効力感の絵カードの例(①けんかの仲裁)

て右の絵を指差して) こっちの男の子／女の子はお友だちを仲直りさせることができません」と効果的にふるまえる子とふるまえない子の絵を示し、「では、どちらが○○くん／ちゃんに似ていますか?先生に教えて下さい」と質問し、子どもがどちらかの絵を選択するのを待った。子どもが絵を選択したら、その下に置かれている絵カードの大小の円を指差しながら、「(大きい方の円を指して)○○くん／ちゃんはいつも□□なのかな?それとも(小さい方の円を指して)時々□□なのかな?」と尋ね、子どもの選択の組み合わせを記録用紙に記入した(図)。なお、2枚目の絵カードを示す時は必ず子どもから見て左の絵から示すようにし、左の絵には効果的にふるまえる子とふるまえない子が交互に現れるようにした。また、絵の選択後、下に置かれている円の絵を示す時は、必ず幼児から見て左の円から示すようにした。質問の順序は似たような質問項目が連続しないよう2通り作成し、子どもにランダムに提示した。さらに、子どもに与える残存効果を考慮し、最後の質問項目はいざごごに関する場面にならないようにした。

評定は、2枚目の左右に置かれた絵カードに対する子どもの選択(効果的にふるまえる子／ふるまえない子)の2件法と、その後の頻度を示す大小の円の選択(いつも／時々)の2件法の組み合わせにより、「効果

表1 幼児用対人的自己効力感尺度の項目分析結果

質問項目	平均値 (SD)	負荷量	共通性	G-P 分析
①遊んでいる友だちに「一緒に遊んで」と言ったら、遊びに入れてもらえる。	3.43 (0.88)	.56	.31	6.80**
②遊び方を聞きに来た友だちに、教えてあげられる。	3.54 (0.74)	.69	.48	4.39*
③友だちを困らせている子どもに「やめなよ」と言ったら、やめてもらえる。	3.44 (0.81)	.68	.47	4.61**
④友だちを「一緒に遊ぼう」と誘ったら、遊んでもらえる。	3.51 (0.70)	.65	.42	4.70**
⑤先生が「ペアを作って」と言ったら、すぐにペアを組む友だちを見つけられる。	3.44 (0.75)	.67	.45	4.03*
⑥遊びを手伝ってくれる人を探している友だちに、「一緒にやるよ」と言える。	3.50 (0.79)	.68	.46	5.58**
⑦友だちに「手伝って」と言ったら、すぐに手伝ってもらえる。	3.34 (0.81)	.50	.25	4.37**
⑧横入りをしようとしている友だちに「やめなよ」と言ったら、並び直してくれる。	3.61 (0.69)	.55	.31	3.42*
⑨何をして遊ぼうか相談している時に「これで遊ぼう」と提案したら、その遊びをすることになる。	2.81 (1.01)	.32	.10	4.37**
⑩友だちに悪口を言われて「やめてよ」と言ったら、やめてもらえる。	3.31 (0.91)	.71	.50	5.98**
⑪けんかしている友だちに「仲直りしなよ」と言ったら、仲直りさせることができる。	3.42 (0.83)	.75	.56	6.21**
⑫ある子どものパーティーに「お友だちも呼んだら」と言ったら、その友だちを呼んでもらえる。	3.47 (0.63)	.52	.27	4.83**

* p<.01, ** p<.001

的にふるまえる子」と「いつも」の組み合わせを4点、「効果的にふるまえる子」と「時々」の組み合わせを3点、「効果的にふるまえない子」と「時々」の組み合わせを2点、「効果的にふるまえない子」と「いつも」の組み合わせを1点とする4件法で行った。

3. 再検査の実施

幼児用対人的自己効力感尺度について、再検査による尺度の信頼性を検討するために、対象となった70名のうち無作為に選ばれた31名（男児11名、女児20名）について、2か月後に再び同様の手順で対人的自己効力感を測定する面接を行った。

4. 有能感・受容感の測定

幼児用対人的自己効力感尺度の併存的妥当性を検討するために、幼児期の自己評価を測定する尺度として広く使われている有能感・受容感の測定を行った。これは、幼児および小学校低学年の児童用の尺度²⁾を参考に、日本語版が作成されたもの³⁾であり、「学習面の有能感」、「運動面の有能感」、「仲間からの受容感」、「母親からの受容感」の4つの下位尺度から成っている。

対人的自己効力感の測定後の2013年12月に、対象となった幼児70名のうち、転園となった女児1名と面接を拒否した男児1名を除く68名に対して、対人的自己効力感と同様の面接手順で有能感・受容感の測定を行った。測定項目は、「学習面の有能感」、「運動面の有能感」、「仲間からの受容感」、「母親からの受容感」

それぞれ7項目で、男児用・女児用それぞれの絵カードを作成して幼児に面接を行い、4～1点の4段階で評定した。

5. 分析方法

本研究では、SPSS Ver.19.0を用いて単純集計、主成分分析、t検定、相関分析を行った。なお相関分析の際には、Pearsonの相関係数を求めた。

III. 結 果

1. 各項目の平均値と標準偏差

表1に、幼児用対人的自己効力感尺度の各項目の平均値とSDを示した。各項目の平均値は2.81～3.61で、幼児は全体的に対人的自己効力感を高く評価する傾向にあることが示された。これまで多くの研究^{2-6,13,14)}で、幼児期は自己評価が高いことが特徴であることが繰り返し指摘されていることから、本研究の結果も幼児期の自己評価の特徴が表れたものと考え、これらの項目をそのまま採用することとした。

項目の中でも特に平均値が高かったのは、項目⑧の横入りする友だちへの制止・注意を表す場面であり、次いで項目②の遊び方を聞かれて教える場面、項目④の友だちを遊びに誘う場面であった。一方、平均値が最も低かったのは、項目⑨の遊びの提案を採用される場面であった（表1）。

2. 尺度の分析

幼児用対人的自己効力感尺度は、児童用の尺度と同様に、対人的な課題が生じる状況において効果的にふるまえるかに対する自己評価を測定する目的で作成されたため、1次元構造を仮定した。主成分分析を行ったところ(表1)、12項目すべてが第1主成分に.32以上の負荷量を示した。寄与率は38.1%であった。12項目の α 係数は.84で、高い内的整合性が認められた。

さらに、12項目の得点の合計点を算出し、合計点の上位25%を上位群(16名)、下位25%を下位群(16名)として、各項目のG-P分析を行った。その結果(表1)、すべての項目について上位群の幼児の方が下位群の幼児よりも平均値が高いことが示され、どの項目も弁別力があることが確認された。

これらのことから、12項目の得点を合計したものを、幼児の対人的自己効力感として用いることとした。対人的自己効力感の平均値は40.86(SD 5.78, range 25~48)であった。

3. 再検査による信頼性の検討

測定を行った対人的自己効力感と、2ヵ月後に実施した再検査での対人的自己効力感との相関分析を行ったところ、有意な関連が示され($r = .67, p < .001$)、尺度の再検査信頼性が確かめられた。

4. 尺度の併存的妥当性の検討

本尺度の併存的妥当性を検討するために、有能感・受容感尺度で測定された学習面、運動面の有能感、仲間、母親からの受容感の4つの下位尺度について、対人的自己効力感の上位25%の上位群の幼児と下位25%の下位群の幼児で違いがみられるか、t検定を用いて調べた。その結果(表2)、対人的自己効力感の上位群の幼児の方が下位群の幼児よりも、運動面の有能感、

表2 対人的自己効力感の上位群・下位群による有能感・受容感の平均値の差の検定

	対人的自己効力感		t
	上位群(N=14) 平均値(SD)	下位群(N=16) 平均値(SD)	
有能感・受容感			
学習面の有能感	26.36 (2.95)	24.94 (1.91)	1.58
運動面の有能感	24.64 (3.34)	21.50 (3.90)	2.35*
仲間からの受容感	25.50 (3.65)	19.93 (4.22)	3.83**
母親からの受容感	23.21 (5.29)	20.06 (4.14)	1.83†

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

仲間からの受容感が高いことが示された。

5. 性別、月齢との関連

幼児の対人的自己効力感と性別、月齢との関連を調べた結果、性別による差($t = 0.91, ns$)、月齢との相関($r = -.06, ns$)のいずれも有意ではなかった。また、性別ごとに対人的自己効力感と月齢との関連を調べたところ、男児、女児ともに有意な相関は示されなかった(男児: $r = .05, ns$, 女児: $r = -.13, ns$)。

IV. 考 察

本研究では、幼児期の対人的な有能さを測定する尺度を作成するために、絵カードを用いた12項目の幼児用対人的自己効力感尺度の開発を行った。

幼稚園年長児を対象に、本尺度を用いて対人的自己効力感の測定を行った結果、各項目の平均値は2.81~3.61の範囲であることが示された。これは、他の領域において幼児は高い自己評価を行うことを示した先行研究^{2,3,14}と同様の結果であり、本尺度は幼児期の自己評価の特徴を“対人的な領域での有能さ”の領域において適切にとらえることができたと解釈できるだろう。

さらに、本研究の幼児において特に平均値が高かった項目として、横入りする友だちへの制止・注意を表す場面(項目⑧)、友だちを遊びに誘う場面(項目④)があるが、これらは児童用の尺度¹²⁾においてもそれと対応する項目の平均値が3.54(SD 0.71)、3.36(SD 0.84)と比較的高かった。子どもにとっては、集団生活のルールを主張することや仲の良い友だちを遊びに誘うことは、比較的「自分は有能にふるまえる」と感じやすい場面なのかもしれない。

次に、これまで幼児の自己評価を測定する際に最も広く使われている有能感・受容感尺度の研究結果から、本尺度の項目の平均値の特徴を見ていく。有能感・受容感尺度には学習面、運動面の有能感、仲間、母親からの受容感の4つの下位尺度があるが、先行研究³⁾では、有能感の方が受容感よりも自己評価が高いことが示されており、この傾向は近年行われた他の研究^{4,6)}においても同様である。この理由として、自分自身の有能さの評価(有能感)とは異なり、受容感他者との関係の質が影響することから、否定的な判断になりやすいと考えられている^{2,3)}。本研究の対人的自己効力感には有能感と同様に高い値であり、“有能さ”に対する

自己評価を対人的な領域において測定できたととらえられる。

本尺度の信頼性については、高い内的整合性が認められ、再検査による信頼性も確認された。また、有能感・受容感尺度との併存的妥当性を検討したところ、対人的自己効力感が高い上位群の幼児の方が下位群の幼児よりも、運動面の有能感、仲間からの受容感が高いことが示された。このことから、幼児用対人的自己効力感尺度の併存的妥当性は、ある程度確認できたと考えられる。

さらに、幼児の対人的自己効力感の性差について検討を行ったところ、男児と女児で有意な差はみられなかった。このことは、性別による遊び内容の違いよりも、日々の仲間とのかかわりの中での幼児の成功・失敗体験の方が、幼児の対人的な有能さに対する自己評価に影響を与えやすい可能性を示唆していると考えられる。しかし、他の領域の自己評価では幼児期の性差についてこれまで明確な答えは出ておらず、幼児期には性差はみられないという結果^{6,7,15,16)}と、領域(運動面など)によっては性差がみられるという結果^{4,10,14,17)}の両方が存在している。児童を対象にした対人的自己効力感の研究¹²⁾では、小学4～6年生の子どもにおいて女子の方が男子よりも高いという性差があることが示されていることから、本研究の結果だけで何らかの結論を語るのではなく、子どもの自己評価の形成過程で性差を生み出す状況とはどのようなものなのか、さらに検討を加えていく必要があるだろう。

最後に、本研究の課題について述べる。第一に、本研究では幼稚園年長児のみを対象としたため、年長児の特徴が研究結果に反映した可能性が考えられる。今後は対象児の年齢範囲を広げ、年少児、年中児も含めた検討を行う必要がある。第二に、本研究では幼児自身の対人的自己効力感しか測定していないが、今後は担任保育者の評定との関連についても検討し、本尺度の妥当性をさらに確認していく必要があると考える。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Heatherton TF, Wyland CL. Assessing self-esteem. In S. Lopez & R. Snyder (Eds.), *Positive Psychological Assessment: A Handbook of Models and Measures*. Washington, DC: American Psychological Association, 219-233.
- 2) Harter S, Pike R. The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development* 1984; 55: 1969-1982.
- 3) 桜井茂男, 杉原一昭. 幼児の有能感と社会的受容感の測定. *教育心理学研究* 1985; 33: 237-242.
- 4) 中澤 潤, 泉井みずき, 本田陽子. 幼児の有能感の認知と遂行との関連: 幼児楽観性の視点から. *千葉大学教育学部研究紀要* 2009; 57: 137-143.
- 5) Schneider W. Performance prediction in young children: Effects of skill, metacognition, and wishful thinking. *Developmental Science* 1998; 1: 291-297.
- 6) Coplan R, Findlay LC, Nelson LJ. Characteristics of preschoolers with lower perceived competence. *Journal of Abnormal Child Psychology* 2004; 32: 399-408.
- 7) Verschueren K, Buyck P, Marcoen A. Self-representations and socioemotional competence in young children: A 3-year longitudinal study. *Developmental Psychology* 2001; 37: 126-134.
- 8) Bretherton I, Gullon-Rivera AL, Page TF, et al. Children's attachment-related self-worth: A multi-method investigation of postdivorce preschoolers' relationships with their mothers and peers. *Attachment & Human Development* 2013; 15: 25-49.
- 9) Cassidy J. Child-mother attachment and the self in six-year-olds. *Child Development* 1988; 59: 121-134.
- 10) Verschueren K, Marcoen A, Schoefs V. The internal working model of the self, attachment, and competence in five-year-olds. *Child Development* 1996; 67: 2493-2511.
- 11) Wheeler VA, Ladd GW. Assessment of children's self-efficacy for social interactions with peers. *Developmental Psychology* 1982; 18: 795-805.
- 12) 松尾直博, 新井邦次郎. 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係. *教育心理学研究* 1998; 46: 21-30.
- 13) Tirosh D, Tsamir P, Levenson E, et al. Exploring young children's self-efficacy beliefs related to mathematical and nonmathematical tasks performed in kindergarten: Abused and neglected children and

- their peers. *Educational Studies in Mathematics* 2013 ; 83 : 309-322.
- 14) Marsh HW, Craven R, Debus R. Structure, stability, and development of young children's self-concept : A Multicohort-multioccasion study. *Child Development* 1998 ; 69 : 1030-1053.
- 15) 園田菜摘. 幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情, しつけ行動との関連. 横浜国立大学教育人間科学部 紀要 II 2013 ; 15 : 1-7.
- 16) Gulio DF. Perceived competence and social acceptance in kindergarten : Its relationship to academic performance. *Journal of Educational Research* 1987 ; 81 : 28-32.
- 17) Marsh HW, Ellis LA, Craven RG. How do preschool children feel about themselves ? : Unraveling measurement and multidimensional self-concept structure. *Developmental Psychology* 2002 ; 38 : 376-393.

[Summary]

Based on a scale for elementary-school-age children, a scale for assessing young children's social self-efficacy was developed. Seventy 5- and 6-year-old preschool children (35 boys and 35 girls) completed the Pictorial Scale of Social Self-Efficacy for Young Children. To assess the validity of the scale, I compared the children's Self-Efficacy Scale scores with other self-ratings of perceived competence and social acceptance. The reliability of the scale was supported by Cronbach's alpha coefficient and a test-retest correlation over 2 months. The scale also demonstrated acceptable validity. Characteristics of young children's social self-efficacy are discussed.

[Key words]

young children, social self-efficacy, reliability, validity